思わぬ風景との出会いの重なりが、武蔵野と向井潤吉を深く結びつけたのであろう。実際、私が東松山を散策した折にも、思いがけないところに小径が現れ、主幹道路にはない野趣残る風景、いわば武蔵野の入り口ともいえる風景に出会うことが幾度もあった。なるほど、これが先人たちの愛した武蔵野の佳趣ではないかと、その名残を深々と味わった。

武蔵野の入口に出会う（上２つ）
（埼玉県東松山市神戸付近）平成18年3月撮影

武蔵野　春のきざしを求めて

武蔵野の早春に取材した《春叢》に目をうつしてみたい。この作品は、向井潤吉が最晩年、８７歳の時に描いた秀作である。画面を水平に空と大地で二分し、冴える青空の清澄な色彩と、前景の枯れ草の落ち着いた褐色が、互いに呼応しながら融和し、安定した調子を画面に醸出している。

中央には草屋根の民家がひっそりとたたずみ、周囲の草木によって覆われて、その全容は見えないが、よく手入れの整った屋根の姿に、日々誠実に営まれてきた生活の様子が想像される。

早春、まだ春色なお十分にそろわず、冬の名残が漂う中でも、春昼の光はどこか浮き立つような気持ちを誘う。民家に寄り添い誇らしげに咲く白梅は、辺り一面にその香気を漂わせているのであろう。その香りが、風景に残る寒さを緩ませて、向井潤吉は思わず足を留めたのかもしれない。慎ましく佇むこの民家の相貌が、向井潤吉に三脚を広げさせたのであろう。

向井潤吉は、この取材地である埼玉県東松山市神戸（ごうど）へは、昭和５５年から昭和６３年のあいだ、毎年早春に訪れている。神戸周辺の新河岸、川越、坂戸、男衾（おぶすま）、寄居など東武東上線沿線一帯は、度々取材を重ねた地である。

「もう秩父も近いので、私はこの一帯を勝手に奥武蔵野と呼んでいる。風さえ吹かなければ、私はこの枯れ野原の上に寝転んで、行く雲の気ままな動きを見ているのが、好きである。折々、電車の軋りが聞こえるだけで、何もかも抜けたような長閑さである。」

（『アサヒグラフ　別冊　美術特集　向井潤吉』昭和５１年）

このように、向井潤吉は武蔵野の風景を心から愛し、自らの制作の大切な拠点と定めていたようだ。武蔵野は向井潤吉にとって、制作の源泉ともいえる地なのである。

≪春叢≫（埼玉県東松山市神戸）昭和63年（1988）

東北が迎える春のすがた

武蔵野の桜も葉が生い茂るころ、東北にようやく春のしらせが届きだす。半年間雪に閉ざされた村では、どのように春を迎えるのであろうか。私は、一昨年の５月半ば、全国でも有数の豪雪地・山形県田麦俣（たむぎまた）を訪れた。

「朝晩はぐんと冷えるから」と宿の人に言われていたので、汗ばむ東京の陽気を忘れて、冬の上着をかばんに詰めた。新庄駅から在来線に乗り換え、最上川沿いに日本海側へ向って横断していく。五月晴れの好天に恵まれたものの、もう春は過ぎ去ってしまったか、と出遅れた旅路を少しばかり悔やんだ。

バスを降りて私は、ここに春がきたばかりであることを確認してほっとした。やはり、まだわずかに空気が冷たく堅い。小高いバス停からは、小さな村の様子が見渡せ、日陰に雪の固まりを残しつつも、ようやく芽吹きだした草木が勢いよく民家を取り囲んでいた。梅から桜へと少しずつ訪れる武蔵野の静かな春とは違って、東北の春は、野も山も川もみな一斉に春の光を受けて生気づき、輝きだす。